

1. 背景とゆらい

春まきさやえんどうは県北地方を中心に産地化されているが、2～3年前よりべと病が発生し、その対応策が問題となってきた。本病は新奇病害であり、灰色かび病に誤診されやすいことや慣行薬剤散布体系では防除が困難であるために、被害が大きくなり、発生地域が拡大の一途をたどっている。発生生態と防除法について検討中であるが、早急に対策が求められているので、本病の診断法と当面の対策について、参考に供する。

2. 技術内容

1) 診断法

地上部のいずれの部位も発病するが、一般的には葉の病徴が目立ち、葉の裏面に灰色の厚いかびが生ずる。この確認が診断の要点となる（写真Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）

2) 対策

- (1) 越冬は被害茎葉、さやの中で形成されている卵胞子（写真Ⅶ）で行われるので、これらを焼却処分する。
- (2) 発病さやの種子の内部にも卵胞子が認められ、種子伝染することが知られているので、発生地における採種は避ける。

3. 指導上の留意事項

- 1) 本病と誤診されやすい灰色かび病は落下した花弁が止まりやすい托葉上で発病し、茎にも病斑が進展する（写真Ⅵ）。灰色かび病の病斑は円形～不正形の病斑であり、葉の表面にかびが発生しやすい。これに対してべと病は、葉脈に区切られた角形病斑となり、葉の裏面にかびが発生する。このかびを顕微鏡で観察すると、分生子柄と分生胞子が認められる（写真Ⅳ）。

2) 現在、横行防除薬剤として用いられている薬剤(トップジンM、ベンレート、ポリオキシシン、モレスタン等)はべと病に対する防除効果がないので留意する。

4 当該事項にかかる試験研究課題名

ヤマセ常襲地帯における農作物の安定生産技術の体系化
野菜の低温性病害の防除法の確立

5 参考文献・資料

昭和57・58年度岩手県園芸試験場成績書 園芸作物の病害虫に関する試験成績

6 試験成績の概要

県内のべと病発生状況

被害が大きい地域：軽米町、九戸村

小発生であるが発生を確認した地域：岩手町

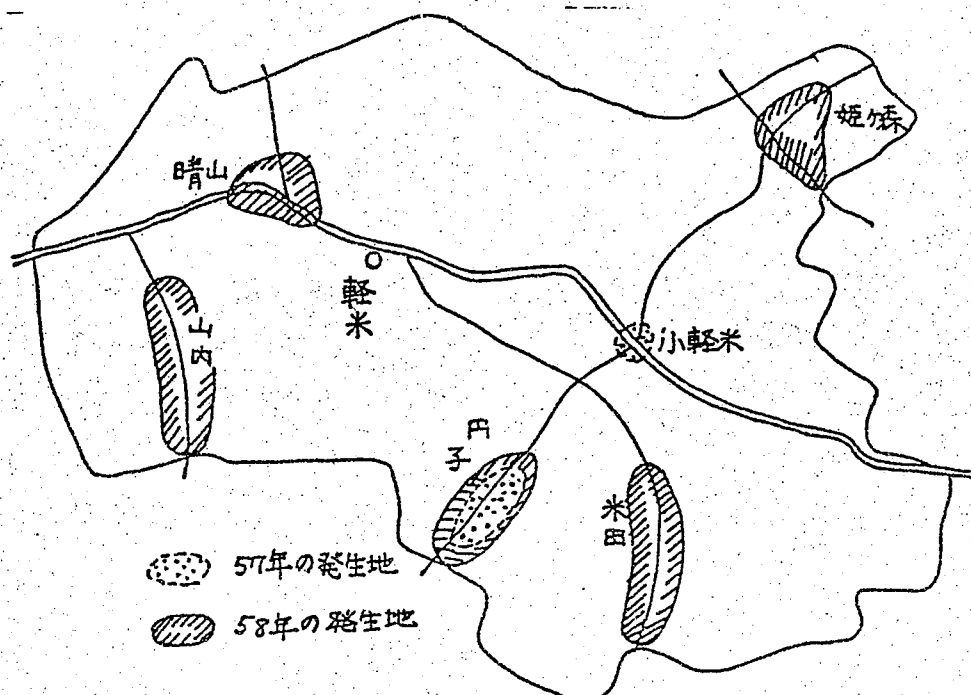


図1 軽米町におけるべと病の発生状況 (軽米普及所)

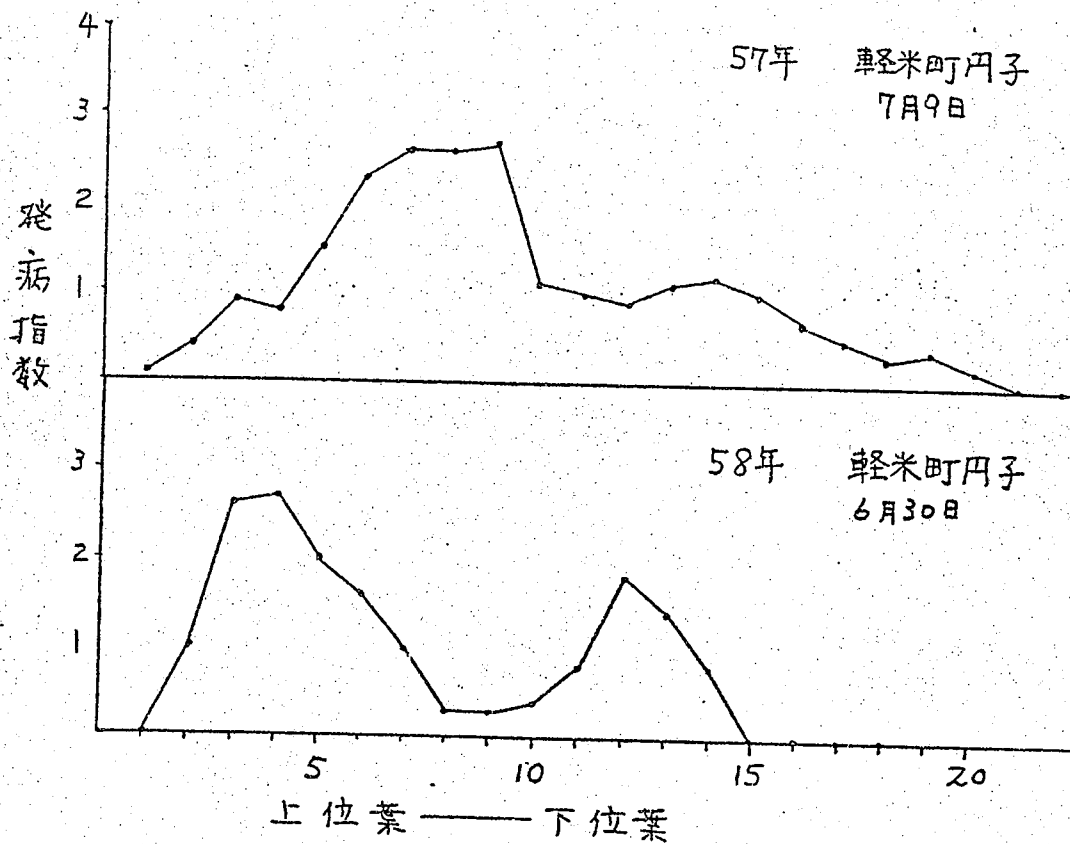


図 2 発病状況

発病指数 | 病斑面積率

1	1~25%
2	26~50
3	50~75
4	76~

表 1 初期発生時^{a)}における卵胞子調査

病斑部位	調査葉数	卵胞子形成葉
下位葉	10	0
中位葉	10	9
上位葉	10	0

a) 6月17日

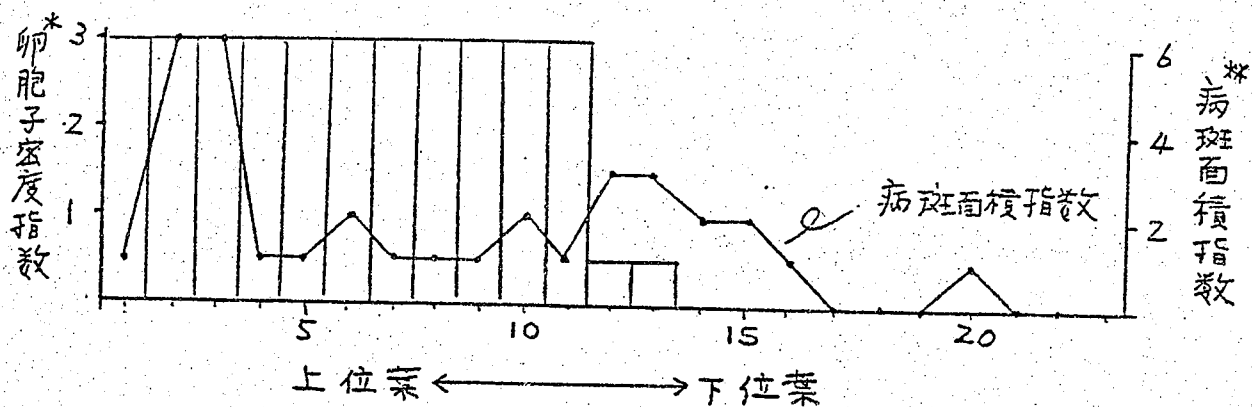


図2 発病後期における卵胞子形成状況 (7月22日)

* 卵胞子密度指数 1 1視野当たり($\times 150$) 1~50個
 2 " 51~200
 3 " 201~

** 病斑面積指数 1 病斑面積率 1~5%
 2 " 6~10
 3 " 11~25
 4 " 26~50
 5 " 51~75
 6 " 76~